「黙示文学と黙示思想」に関するコメント (研究フォーラム)

メタデータ	言語: Japanese
	出版者:
	公開日: 2021-10-01
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 出村, みや子
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://tohoku-gakuin.repo.nii.ac.jp/records/24650

「黙示文学と黙示思想」に関するコメント

出　村　みや子

1.　ユダヤ教黙示文学理解への手がかり

北先生と原口先生のお二人のご発表を伺い，旧約聖書時代のみならず，それに続く新約聖書時代からその後の教会史研究においても，黙示思想研究の重要性と今後さらに理解を深める必要性を確認することができた。しかし現存する黙示文学に区分される文書の成立には時代的にも地域的にも相違があり，内容も多岐にわたっているゆえに，黙示思想の専門家ではない私自身にとってその全貌をとらえることは容易ではない。そこでお二人のご発表に対してコメントを加えるのに先立ち，旧約，新約聖書と黙示文学・黙示思想との関係についてわかりやすく理解するための手立てとして，このように複雑な現象を理解するための一番手近な方法として聖書学者の大貫隆氏が提唱しているアプローチを最初に紹介するのがよいと思う[1]。

まずこれらの文書を成立年代について見てみると，ユダヤ教黙示文学の「前史」として挙げられるのが，旧約聖書のゼカリヤ書（前5-3世紀），ヨエル書3-4章（前3世紀），イザヤ書に二次的に付け加えられた同34-35章（前3-2世紀）および24-27章（前2世紀）である。

また本格的な黙示文学の成立が見られるのは前二世紀のダニエル書以降であり，これらは「盛期黙示文学」として区分される。盛期に区分される文書のうちほぼその全体が多くの場合にはさまざまな言語への翻訳の形で)伝えられているものとして，『エチオピア語エノク書』（前2-1世紀），『モーセの遺訓』（紀元前後），『スラブ語エノク書』（後1世紀），*『第四エズラ書』（後1世紀），『シリア語バルク黙示録』（後1世紀），*『ギリシア語バルク黙示録』（後1-3世紀），*『シビュラの託宣』III-V巻（前2-後2世紀），*『アブラハム黙示録』（後1-2世紀）がある。

1　引用は，荒井献・大貫隆・小林稔・筒井賢治訳『ナグ・ハマディ文書 IV 黙示録』（岩波書店，1998年），1-16頁。

また断片的にのみ伝わるものとして，*『ゼファニヤ黙示録』(前1-後1世紀)の他，クムラン(死海)文書に属する「4Q・奥義(断片名b)」，「4Q・アムラムの幻（断片f)」，「11Q・メルキゼデク」などがある。なお*を付した文書は，後代のキリスト教徒の手が加わっていることが確実視されているものであるという。

大貫氏はこれらの文書すべてを調査した結果，合計24の様式要素，あるいは内容的主題が繰り返し定型的に現れることを指摘しているが[2]，この定型的構成要素はギリシア語で「場所」を意味するトポスと呼ばれるものである。そこでこれらの黙示文学の理念型と本質を明らかにするために，「まず個々の黙示録に繰り返し現れる様式要素と主題の目録を作り，その分布状況が時代とともにどう変わってゆくかを調べてみること」が有益であるという。

これらの文書における各トポスの分布状況を図表化したものが，当日に配布した資料の表である[3]。それは1 幻，2 声，3 天使，4 トランス状態，5 遺訓，6 普遍史，7 時代区分，8 事後予言，9 終末待望，10 終末時の艱難，11 天変地異，12 時の計算，13 死人の復活，14 最後の審判，15 エルサレムの更新，16 新しい創造，17 天空の旅，18 自然界の隠された秩序，19 義人と罪人の境遇，20 冥界の旅，21 地上への帰還，22 覚醒，23 秘匿命令，24 伝達命令の24のトポスの分布を比較したものである。これらの要素を手がかりとして現存する黙示文学の概観を大まかに得ることができると考えられる。

2. ユダヤ教黙示文学とキリスト教黙示文学の比較検討

原口先生のご発表に対するコメントを加えるに当たり，この表を参照することによって得られる利点は，ユダヤ教黙示文学とキリスト教黙示

2 なお大貫氏の最新作『イエスの時』(岩波書店，2006年5月)にも，上掲書の別表1に相当する表が29頁以下の「ユダヤ教黙示思想の主要テーマと類型区分」に掲載されているが，16番目に「メシアが登場して，歴史の終末と万物の最終的な完成の間に，「中間王国」を実現する」トポスが加わることにより，順序も多少入れ替わっており，25のトポスが表示されている。

3 上掲書，15-16頁に掲載された別表1と2を参照されたい。

文学の主要な特徴について比較検討することが可能になることである。大貫氏はここから，ユダヤ教黙示文学が「来るべき歴史の終末とあらゆる運命の逆転への待望から出発した」ことを確認すると共に，ヨハネの黙示録より後のキリスト教黙示文学では，トポス 17 から 20 への関心が深められ，「義人と罪人が死後，終末以前のいま現に置かれている境遇への関心」の移行という重要な帰結を導き出している。こうした定型的構成要素〔トポス〕の比較を通じて見えてきた結果を基に，原口先生のご発表に即して三点ほど指摘したいと思う。

第一は，福音書の黙示的部分への理解が深まることである。大貫氏の研究と並んで，秦剛平氏が最近刊行した研究も宗教的原理主義の問題が重要な出発点となっており，秦氏の「イエス時代の対ローマのユダヤ戦争」という論文にはユダヤ教の黙示思想とマルコ福音書との関係が扱われている[4]。ここで取り上げられているヨセフスの『ユダヤ戦記』は，マルコ福音書とほとんど同時期に書かれた文書であるだけに，当時のユダヤ人たちを絶望的な対ローマ戦争へと駆り立てていた神の介入への熱狂主義的待望と，神殿崩壊後の絶望的な様相の記述を，マルコ福音書 13 章のイエスの神殿崩壊と終末を前にした苦難の到来を予告した記事と読み比べることは有益であると思われる。なお本書において秦氏は，原始キリスト教史に関する教科書的記述において資料として引用されることの多いヨセフスの『ユダヤ戦記』については，その記述にいろいろと誇張があり，その信憑性には注意が必要なことを指摘している。

マルコ 13：1-2 は紀元後 70 年のエルサレム神殿の崩壊と炎上を知っていた福音書記者が，事後預言としてイエスの口に入れた言葉であり，後続の記事には「惑わされないように」，「慌てないように」，「気をつけるように」等の弟子たちに対するイエスの警告の言葉が繰り返し用いられている。これは，原口先生のご発表にあった「沈静化」の要素が，マルコ福音書においてはイエスの口を通した「事後預言」として，黙示思想の受容に際してかなりの比重を占めていることを示すものである。従って原口先生の「終末を待つ者に熱狂ではなく，覚醒を促すことは，初期キリスト教伝承に共通な態度であると言える」とのご指摘は，ユダヤ教

4 『あまのじゃく聖書学講義』（青土社，2006 年 5 月），111-140 頁。

黙示文学とキリスト教黙示文学の特徴を比較検討するための重要な視点であるのみならず，現代の世界状況のなかで急速に浮上してきた宗教的原理主義の問題とも関わる重要性を持っていると考えられる。

第二は，黙示思想の伝統がパウロの復活論に及ぼした影響が明らかになることである。コリントの信徒への第一の手紙 15 章に見られる一連の復活の問題に関するパウロの論争には，復活を「終末論的変容」とみなす黙示思想の影響がはっきりと認められる。しかし黙示文学的背景を持つ復活理解は，その後の教会史の流れのなかでは必ずしも主流とはならなかった。ここでその要因として考えられるのが，原口先生も指摘されたように，後の教会に「終末期待の切迫性が薄らぎ，黙示的志向が後退したこと」である。さらに今回のフォーラムの範囲を超えるが，グノーシス主義陣営がパウロ神学を積極的に受容していた事態が生じていたことにより，正統的教会は復活を「終末論的変容」とみなすパウロ的復活理解よりも，福音書伝承に見られる反仮現論的記述を中心とした復活理解を発展させる結果となったものと考えられるのである[5]。

第三は，ヨハネ黙示録の理解とその後のキリスト教黙示文学への影響が明らかになることである。原口先生が指摘したように，ヨハネ黙示録の文書には旧約聖書や，とりわけ 70 年の神殿崩壊以降に成立したと見られるユダヤ教黙示文学の影響がはっきりと読み取れる。David E. Aune は[6]，ヨハネ黙示録には第一エノク書，第四エズラ書，第二バルク書，死海文書との著しい共通性が随所に見られるために，著者が二度目のユダヤ教徒の反乱の際にパレスチナからこの小アジアに移住したのみならず，その際にパレスチナの黙示文学の文献をある程度携えてきたユダヤ教黙示思想家の一員であった可能性が高いと推測している。つまりヨハネ黙示録の著者は当初よりキリスト教黙示思想家であったというより

5 この点については，拙論「初期キリスト教の復活論理解の変遷 (1) オリゲネスの復活論におけるパウロの影響」，『ノートルダム清心女子大学キリスト教文化研究所　年報』第 21 号，1999 年 3 月，1-31 頁，ibid., 'Biblical Tradition of Resurrection in the Early Christianity: Pauline Influence on Origen's Theology of Resurrection', *Annual of Japanese Biblical Institute*, Vol. 25/26, 1999/2000, p. 135-151 を参照されたい。

6 David E. Aune, 'The Apocalpse of John and Palestinian Jewish Apocalyptic'.

は，後にキリスト教徒になったという可能性が高いことを指摘するのである。原口先生が言う，ユダヤ教の黙示文学の様々なモチーフが「キリスト教化」されていく経過も，この点から説明できるかも知れない。その意味でもヨハネ黙示録の研究に，ユダヤ教黙示思想の研究は欠かせないことになる。

3. ヨハネ黙示録の位置づけについて

最後に，後代の教会史におけるヨハネ黙示録の位置づけの問題を取り上げたい。正統的教会が特定の文書を「規範」として固定化する正典形成に着手した背後には，教会の内外で生じていた様々な異端の問題があったことが指摘されよう[7]。その第一は先に言及したパウロ書簡の位置づけとも関連するが，グノーシス主義陣営が彼らの秘教的教えの書を大量に生み出していたことである。

第二に黒海沿岸の貿易都市シノペ出身のマルキオンが，いわば最初の正典作成の試みを行ったことで，彼は139-144年にローマで独自の改訂を施したルカ福音書とパウロの十通の手紙から成るカノーンを発表して物議を醸した。

そして第三にモンタノス主義の問題である。ヨハネ黙示録の位置づけの問題とも関わるモンタノス主義は，預言者モンタノスと二人の女性預言者を中心に，二世紀後半に小アジアのフリュギアで生まれ，ローマや北アフリカにまで広がった熱狂主義的な黙示文学的運動であったと伝えられている。彼らが著した数多くの預言的文書は後に異端として排斥されたために現存しないが，その一員となった三世紀の北アフリカ出身の神学者テルトゥリアヌスの記述からその教義の概略が知られる。

最近ではフェミニスト神学が女性の預言と著述活動の視点から，モンタノス主義の見直しを進めている。彼らはおそらく，パウロ書簡に見られるようなカリスマ的な霊の賜物を重視し，聖霊の直接的導きを強調する集団であったらしい。彼らは預言活動や性倫理において，初期キリスト教会の原初の形態を急進的に保持しようとしたために，正統的教会か

7 この問題について拙論「新約聖書はなぜ二十七文書になったのか」，『AERA Mook 新約聖書」がわかる。』（朝日新聞社，1998年）を参照されたい。

らは異端視される結果となった。フェミニスト神学者のスザンナ・エルムは，モンタノス主義を痛烈に断罪した反異端論者のエピファニオスが引用する彼らの記述について，次のように述べている。

「これらの引用には，運動の中心にある状況がきわめて簡潔に含まれている。つまり，預言による女性および男性の宗教的リーダーシップである。これらの預言の内容は，「モンタノスと彼に伴う女性たち」―― 彼女たちは，主な資料によるとマクシミラとプリスキラ（プリスカ）と呼ばれる ―― によって，恍惚状態で発せられたもので，きわめて終末論的で黙示的であった。「なぜなら，かれらがマクシミラと呼ぶ者，女預言者，が宣言するからである。『私の後にもはや預言者は出現せず，成就があるのみである』」（エピファニオス『パナリオン』48.2.4 の『託宣』6）」[8]。

エルムによれば，ヨハネ黙示録の伝統は「深く小アジアに根付いたものであり，モンタノス主義の教えに特別な影響を及ぼした」[9] ことは明らかであり，そのために正統的教会内部にヨハネ黙示録その他の黙示文学全般に対する否定的評価を生み出すこととなった。ヨハネ黙示録の正典性をめぐっては議論が続き，とりわけ東方教会ではこの文書が正典に加えられるのは六世紀以降のことである。この問題は原口先生が預言と黙示との関連について，「初代教会にはこのような概念上・言語上の区別は意識されていなかった」と指摘されていることの重要な裏づけとなるだろう。さらに三世紀後半に生じた北アフリカのドナティスト運動にも，ヨハネ黙示録の影響が指摘されている[10]。

結論

以上の考察を通じて，黙示思想の影響は旧・新約聖書思想の形成に多大な影響を及ぼしたのみならず，後の教会史においても依然としてその影響力を失わなかったことが明らかになったと思う。教会が置かれたそ

8　エリザベス・シュスラー・フィオレンツァ編『聖典の探索へ　フェミニスト聖書注解』日本基督教団出版局，2002 年収録のスザンナ・エルムによる第八章「モンタノス主義者の託宣」108 頁参照。

9　上掲書，109 頁。

10　教会史におけるヨハネ黙示録の受容の問題について詳しくは，Charles Kannengiesser, *Handbook of Patristic Exegesis : The Bible in Ancient Christianity*, Brill, 2004, p. 368-373 を参照されたい。

の時々の状況により様々な判断が下されてきた黙示思想の系譜については，いまだ十分に解明されていないのが現状であり，今回取り上げたグノーシス主義，モンタノス主義，ドナティスト運動といった教会史に記録された様々な宗教運動を考察するための重要な要素であることは否定できないだろう。